

角川地区の地元学からの活動展開  
「それは、角川（が特殊）だから  
できるんだよ」  
という反応

本当にそうなのか？

森・里・川・海の多様な各地域集落で  
実験的調査-活動を実践し確かめる必要

「NPO法人里の自然文化共育研究所」の設立  
広域連携活動の展開

つまり、角川の里をモデルにしつつも、いろんなところで地元学を展開し、地元の方々が勝手に育つように、お手伝いしながら、交流と学習による、地域ごとの多様な地域づくり活動を構想していく、というプロジェクトを展開

「外部から応援隊があるなら、やってみてもいいかな、むしろこんなことやりたいかな」  
という反応



# 最上川学運営エリア構想イメージ（連携NPO・地域活動団体位置図）

各地域活動団体や中間支援NPOと連携協働しながら最上川学の運営と活動を進めていきます。



● 関川しな織の里協同組合

青：山形大学関係機関  
 赤：地域活動団体  
 黄：中間支援NPO

# 森

里山保全活動  
知恵・技術の伝承、  
森林環境教育を展開











里

鶴岡市松ヶ岡はじめとして  
庄内最上地方12か所で  
地元学活動を展開







# 川～最上峡を中心とする川漁文化伝承と観察会・保全活動



地元の川漁師と生き物調べ



最上峡をカヌーで探検



水質調査



川面から最上峡の川と森林観察





2009/12/12



# 海～海辺の集落の地元学と自然文化交流～

山村の高校生が海辺の森林ボランティア活動



海辺の地元学を  
実施！



山村の住民と海辺の  
住民が食文化交流会  
を実施







# 戸沢・角川地区 × 酒田・飛島法木地区

## 住民同士が初交流

戸沢村角川地区で採れた山菜を酒田市飛島法木地区の住民に紹介するなどした交流会  
＝酒田市飛島



戸沢村角川地区の住民が九、十の両日、酒田市飛島を訪れ、法木地区の住民と交流した。森の角川と、海の飛島の住民同士が、互いの埋もれた「宝」を探し出し、地域活性化の足掛かりにしようとの試み。初の交流となった今回は、互いに郷土料理を出し合い、味わうとともに、意見を交換した。

角川地区の自然環境学習グループ「角川里の自然環境学習校」（斎藤久一代表）では、活動を行っており、去年、住民が「里の先生」となり、ンバーが飛島に行つて県漁業地元の文化や伝統などを次世代に伝えている。二〇〇六年協同組合飛島支所女性部（斎藤栄子部長）と交流。その後、からは同学校の研究部が、活今回の話がまとまった。

# 森林と海の宝 地域の力に

## 郷土料理出し合い、意見交換

交流活動には、同学校と、同学校研究部が昨年、設立した特定非営利活動法人（NPO法人）「里の自然文化共育研究所」（大山勇理事長）、同女性部の関係者約二十人が参加。法木会館で開かれた郷土料理交流会では、角川地区の住民がフキの煮物やミズのとたきなどの山菜料理を出したのに対し、飛島側はスルメイカの煮物やサザエのつぼ焼きなどを披露した。

また、飛島では間もなく、トビウオの焼き干し作りが本格化するが、調理過程で欠かせない炭が不足している。一方、角川地区はナラを用いた「日山白炭」の産地として有名。そこで、トビウオの焼き干し作りは日山白炭を利用してもらうきっかけにしようとして、四十五分を提供した。

里の自然文化共育研究所の出川真也専務理事は「山と海が一緒になったときに発揮される力に可能性を感じた。事業化に向け、角川の山菜と飛島の魚を用いたレシピを開発してどうかといったアイデアが出ていたと話していた。

2008年  
6月13日  
山形新聞  
記事より

## 5. 最新の状況 - 次世代に繋ぐ地域コミュニティの新たな再創造に向けてNPOの役割 -

- (1)活動思想と基盤がしっかりしたコンパクトで機動性あるネットワーク型NPOの育成（行政の傀儡ではない組織形成）
  - ・ 地域内の協働連携の仕組み作り、地域外との協働連携の仕組み作り
  - ・ 各地域の活動目的に寄り添った多様なネットワーク運用のコーディネート機能
- (2)これからのコミュニティのあり方-NPOとコミュニティの相乗的活性化-
  - ・ 伝統的住民だけではない、コミュニティにかかわる外部者も含みこんだ当事者重視のコミュニティという発想
  - ・ モノや豊かな暮らしを生み出すコミュニティとコーディネート機能を持つNPO育成

取り組みの新たな再生を目指して...

ワカモノ達による住民と共に最上川流域の暮らしを学ぶ活動をサポートし様々なエリアで展開



調べて



まとめて



地図を作って



発表!!

多主体連携：地元の高齢者や子ども達など様々な主体とも協力しながら学びを展開しています。



- ・ 地域の人たちから聞き書きを行い、その特徴を知ることが出来た。地域の人に溶け込む方法が分かった。

・ 小学生や地域の人たちと一緒に川で水辺調査を行った様々な生き物を見つけられたと共に、子どもたちとも触れ合う中で、地域に入っていく一つの方法が分かった。



# 最上川流域12団体によるネットワーク～20団体・1万人の流域環境活動の創出を目指す

山形県最上川流域。最上地方(内陸北部)と庄内地方(西部海岸)の農山漁村における活動団体や地域集落・人々と一緒に多様な保全活動を展開していきます。森里川海の多様な自然と文化、暮らしを学び体験しながらふるさとの原風景の再生と元気づくりに参画する実践プログラムです。



飛島漁協女性部法木支部



中野俣を元気にする会



鳥海山 ▲



田茂沢道草ぶんこう



最上川舟下り  
いかだ下り



みつざわ里の資源研究所



若鮎交流塾

里の研究所角川支局

NPO法人  
里の自然文化共育研究所

立谷沢川流域振興  
プロジェクト協議  
会

致道博物館

三瀬の里地域づくり研究  
会  
(つるおかユースホテル)

羽黒古道を守る会

木の俣  
自治会



関川しな織共同組合



宮沢翁塾

森活動：茶  
採団体

里活動：緑

川活動：青

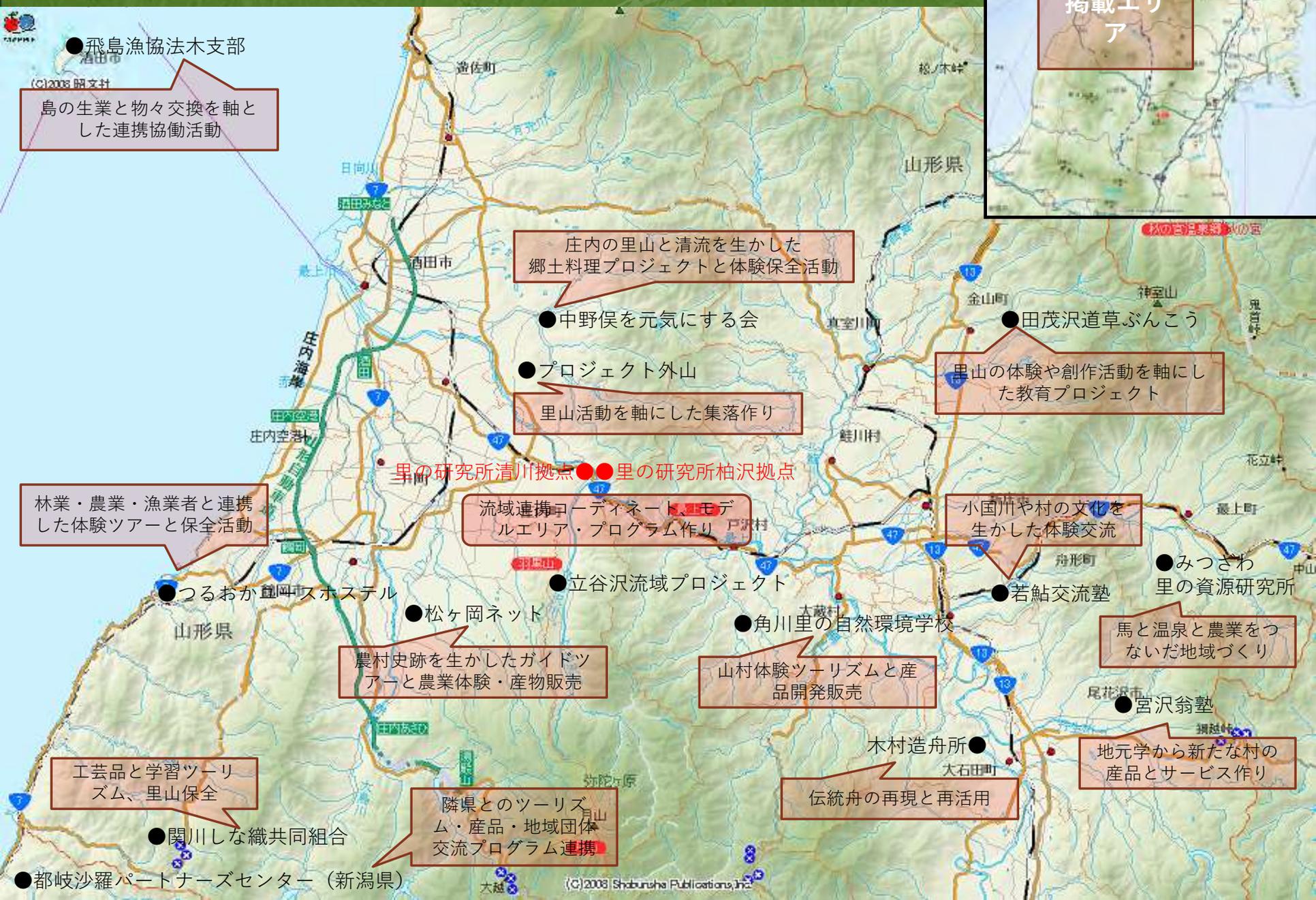
海活動：黄

歴史文化：紫

中間支

# NPO里の自然文化共育研究所 2010年 活動位置図

～多彩な集落特性を生かしたネットワーク活動の構築を目指して～



農山漁村の新たな再創造を夢みて・・・

